

東北文教大学・東北文教大学短期大学部 図書館報

発行 東北文教大学・東北文教大学短期大学部附属図書館

〒990-2316 山形市片谷地515 ☎023-688-7544

目 次

- 本だけではない 図書館(ライブラリー)のはなし…………… 1
- 教員の本棚から…………… 3
- 私のおすすめ本…………… 3
- 令和7年度 図書館報告 …………… 4

本だけではない 図書館(ライブラリー)のはなし

子ども教育学科 学科長 篠 永 洋

図書館は本だけが集まっている場所だと思う？ AVもあるよ

図書館には様々な本(図書)が集まっている。大学の図書館は、その大学が擁する学部・学科に関係する様々な本が集まっている。ほかにも視聴覚資料(映画などのVHSテープ、DVDやBlu-ray、音楽や落語のCDなどの映像・音声資料)が閲覧可能な図書館もある。その視聴覚資料のことをAV(Audio/Visual)と略した表現で呼んでいた。

ちなみに、図書館を指す英語であるlibraryには、「図書館」以外の意味もある。

【ライブラリー(library)】とは

図書館、図書室、(個人の)書庫、書斎、読書室、蔵書、文庫、(映画・レコードなどの)コレクション、貸本屋、(収集した映画・レコードなどを貸し出す)ライブラリー—Weblioより引用—

自分の目の前にある「集積物」と、小さな画面の中に整然と並ぶサムネイルのどちらが五感に強く感じるものがあるのだろうか

先日、三十数年ぶりに武蔵野美術大学へ足を運ぶ機会に恵まれた。その昔、短期大学があったときに友人が数名在籍していたこともあり、何度か足を踏み入れた記憶がある。今回の訪問では初めて【図書館・美術館】へ入った。HPによると2010年の竣工なので、その昔私が訪ねた時にはまだなかった建物である。美術館の階段を上り最初に目にするのは「椅子」。おびただしい数の名作椅子が収蔵展示されているコーナーがある。そして、数歩進むと、通

称「イメラ」と呼ばれる映像資料がコレクションされているライブラリーがある。正式名称は「イメージライブラリー」。収蔵しているDVDなどのリージョンコードに対応した機器も全て使えるように整備しており、この規模は…さすが…美大…とため息が出た。おびただしい数の映像コレクションを眺めながら、私は20代の頃にやっていたアルバイトのことを思い出していた。

日本語に置き換えるだけではない、その表現が伝わるのか

20代の後半、泊まりでビル管理のアルバイトをしていた時期がある。

東京タワーの下、芝公園の向かいにある8階建のオフィスビル。

その地下で、一晩に2回の見回りをするのが主な仕事だった。

外資の銀行、弁護士事務所、業務の詳細はわからないが、海外との取引が多そうな事務所など、見回りをしながら、フロア毎に違う様々な業種の日常業務を垣間見ることが出来た。その中に、映画の字幕翻訳の会社が入っていた。名前は伏せるが、今も業界のトップ近くに存在する会社である。

ここからは当時の記憶で書くので間違っていることもある前提でお願いしたい。

映画の字幕といえば、映画館で公開される映画(洋画:日本映画以外の映画)の画面に載っているイメージがあると思うが、実は映画館でかけられている字幕と、レンタルビデオになった映画の字幕は、別の人が手がけていることが多かった(今はどうか知らないが)。つまり、映画では戸田奈津子が字幕を付けているが、レンタルビデオでは別

の人が付けているということ。また、映画の字幕は劇場で公開される映画だけではなく、国際線の機内サービス用の映画というものもあった。当時はアメリカで公開された半年後くらいに日本公開だったため、JALやANAなど日本の航空会社の国際線では、日本公開前の洋画を機内サービスで観ることが出来た（ちなみに、個別のモニタではなく、頭上に収納された少し大きめのモニタが降りてきて、そこに映し出される）。それも、劇場公開のものとは別の字幕が載っていた。よって、同じタイトルの映画でも、劇場、レンタルビデオ、機内サービスでそれぞれ別の人が字幕翻訳を付けていることもあったのだ（もちろん、そうでない場合もあった）。

そして、タイトルによっては、「日本語字幕版」だけではなく「日本語吹替版」というものが存在した。現在ではサブスクリプションサービスにより、画面中のボタン1つでそれらを切り替えることが出来るが、当時はビデオテープの時代。1本のビデオテープには字幕と吹き替えの両方を載せて切り替えることは出来なかったもので、それぞれ別に存在し、同じタイトルでも「日本語字幕版」と「日本語吹替版」が存在するものもあったのだ。今も40代後半以上の多くの人たちが「洋画は字幕で見るべきもの」「吹き替えなんて論外」と思っている。そんな私も類に漏れることなく「洋画は字幕」派だった。しかしながら、このアルバイトをしたことにより、少しずつ吹き替えのことを知るようになる。

そのオフィスビルは、ワンフロアワンテナントだったので、各階のエレベーターホールからの廊下ではなく、エレベーターのドアが開くとそのままオフィスが広がる仕様だった。なので、そのフロアで働いている最後の一人は、必ず地下の守衛室にひと声かけて、アルバイトがその階にエレベーターが停まらないようにする。それもアルバイトの仕事の一つだった。

殆どのフロアの人たちは、「おわりましたー おつかれさまですー」程度のやりとりだったが、7階に入居していたその映画字幕翻訳会社の人たちは気さくな人が多く、何かにつけてちょっとした会話をしていた。そしてある日、使わなくなったビデオデッキ（民生用ではなく業務用のもの。ジョグが付いていて、細かい操作が出来る）を無償提供してくれた。そのうえ、その会社の応接室兼休憩室には、過去に手がけた作品が並ぶライブラリー（800本くらいのVHS）があり、自由に貸し出してくれることとなったのである。ものによっては、レンタル開始前のものもあったりして、常日頃から生活が困窮していた私を含むアルバイトのメンバーが色めき立ったのは言うまでもない。ちなみに、その時一緒にアルバイトをしていたメンバーは現在、児童福祉施設勤務兼絵描き1名、映像ディレクター2名、大学教員1名である。

その会社にあるライブラリー。そこには主に洋画の字幕翻訳作品のパッケージが並んでいた。そして、たまに同じタイトルが二つ並んで置いてあることに気づく。日本語吹

替版の存在は勿論知っていたが、前述したとおり「洋画は字幕」だという思い込みにより、吹替版でみるヤツはダサい、駄目なヤツ。という最悪の思い込み人間が完成されていたのが当時の私である。週に2〜3回程のアルバイトであったので、順調にライブラリーの映画を消化していった。とはいってもライブラリーの映画全てを「観たい!」と、思うことなどはなく、自分のみでみたい映画だけをみていくと、ほぼ全部みた状態になってしまう。そこで、同じ映画だけど日本語吹替版をみてみよう、何となく手を伸ばして観始めたのだ。

その頃のビデオレンタル店で取り扱っているパッケージは、ほぼ字幕で、日本語吹替版を店頭でみかけることは殆どなかった（一部ディズニー作品など、親子で観る的な作品に限ってみかけることはあった）。なので、字幕版の他に日本語吹替版が同時に存在している作品がそれなりの量存在していることも、ここの会社のライブラリーで知ったのだった。

そして、いつも平日以外にも土日の昼前に出社してくるIさんの影響が一番大きい。当時20代半ばの私よりも少し年上（にみえた）のIさんは、吹替版のディレクターだった。ある日曜日、いつものようにビデオを借りようと7階を訪れたとき、休日の誰もいないフロアにIさんの大きな声が響いていた。ぎょっとしたが、そーっとライブラリーから1本借りて守衛室へ戻り、ビデオをみていた。夜になり、Iさんが退勤する際、昼間のことを聞くと、吹替版のことをいろいろと教えてくれた。吹替版は、吹き替え用の台本を作成するところから始まり、声優のキャスティング、吹き替えのディレクション（演出）も行うこと。その、演出を考えるために、休日の誰もいないフロアで、実際にセリフを声に出してプランを練っていること。字幕には文字数制限があるので、どうしても画面に載りきれない情報も出てくるが、吹き替えではほぼ同等量の情報を載せることが出来るし、セリフに感情を込めることでより豊かな表現で映画の魅力を伝えることが出来ること。つまり、もう一つ日本語による別の作品を作っているのに等しい労力がそこにはあるということを初めて知ったのである。

近年は公開と同時に日本語吹替版も上映されることが多い。特にMCUなどのアクション大作は画面の情報量が多いので、字幕よりも吹き替えの方を好んで観るようになった。そして、本編のエンドロールの後に出てくる日本語吹替版のクレジットの中に、あの会社の名前やそこで働いていた人の名前をみつけると、一人明るくなった客席で小さく拍手をする自分がいる。

当時の私が小さなライブラリーで学んだこと。続きは…また、今度。

『ボクはやっと認知症のことがわかった』

長谷川和夫、猪熊律子 著 KADOKAWA 2019.12 (493.758/ハセ 1 F 人間関係)

皆さんは「認知症」と聞いて、どんなイメージを浮かべるでしょうか。「いろいろなことを忘れてしまう病気」とか、「なんだか大変そう」といった、少し遠い世界の出来事のように感じている人も多いかもしれません。

この本は、そんな私たちの思い込みを、根底から優しく、そしてあたたかくひっくり返してくれる一冊です。著者の長谷川先生は、日本の認知症医療を何十年も引っ張ってきた、まさに「お医者さんの中のお医者さん」です。生涯で何千人もの患者さんを診てきた偉大な専門医なのですが、90歳を前にして、なんとご自身が認知症になりました。

長年、患者さんを「診る側」だった権威が、今度は自分が「看られる側」の当事者になった。そのとき初めて見えた世界が、この本には驚くほど率直に、優しい言葉で綴られています。

一番ハッとさせられるのは、医学のトップにいた先生ですら「自分になってみて初めて、その本当の怖さや心細さがわかった」と漏らしている点です。私たちはどこかで、認知症になると「何もわからなくなってしまうのかな」と思いがちですよね。でも、それは大きな誤解だと先生は言います。認知症になったからといって、ある日突然、違う人間に変わるわけではありません。これまでの自分の延長線である「確かな自分」が、ちゃんとそこにいます。頭がすっきりとクリアな時もあれば、霧がかかったようにわからなくなる時もある。その激しい波の中で、「上手くできない自分」や「物忘れをしてしまう自分」に、誰よりも傷つき、戸惑い、プライドと戦っているのは、他ならぬ本人自身なのです。

そんな長谷川先生が、周りの家族や社会に向けて、こんな言葉を遺しています。

「どうせ忘れるからと、僕抜きで物事を決めないでほしい。置いてきぼりにしないで」

危ないから、失敗するからと、良かれと思って先回りして役割を取り上げてしまうこと。それは優しさのようでいて、実は本人の尊厳を傷つけてしまうことがある。相手を一人の人間として対等に見ることの大切さを、この言葉は教えてくれます。

本の中で、先生は人の話を聴くことを「相手に時間を差し上げること」と表現しています。言葉を遮らず、じっくりと待つ。それは忙しい現代を生きている私たちにとって、とても贅沢で、最も大切な「寄り添い方」ではないでしょうか。

認知症は決して、かわいそうなだけの特別な病気ではありません。誰もがなる可能性のある病気です。周りのほんの少しの理解や、優しい眼差しがあれば、たとえ病気になってもその人らしく、穏やかに生きていくことができる。

この本は、認知症の解説書ではなく、人と人がどう関わればお互いに幸せに生きられるかを描いた「人間愛の教科書」だと私は思っています。

皆さんもいつか、大切な家族や、自分自身がその手前に立ったとき、この本はきっと温かい道標になってくれるはずです。ぜひ、一度、読んでみてください。



図書館学生アルバイトの「私のおすすめ本」

石井 陽向 (子ども教育学科1年)

『学校の「当たり前」をやめた。生徒も教師も変わる！公立名門中学校長の改革』

工藤勇一 著 時事通信社 2018.12 (374.13/クド 子ども教育・保育)

「いい教育とはなんだろう？」と生活の中で考えたことはありますか。私は子ども教育学科に所属し、先生になるための勉強をする中でよくこのテーマを考えています。その参考書になっているのがこの本です。

この本は、東京都千代田区にある麹町中学校という名門中学校の校長先生が「本当に子どもたちの成長に必要なことは何だろう」と考え、「学校そのものの在り方はこうあるべきだ」と説いたものです。例えば、定期考査について「テストに出そうな部分を一夜漬けで頭に叩き込んだ記憶はありませんか(中略)そうしたプロセスを経て獲得した点数・評価は、その生徒にとっての『瞬間最大風速』にすぎず、それをもって成績をつけたり、学力がついていると判断することは、適切な評価とは言えません」という話があります。彼は、今まで「それが当たり前」とされていた「テスト」や「宿題」「運動会」などを、リ・デザインしていきます。

この本は教員免許を取りたい、教職に就きたいと考えている人だけではなく、いずれ大人になる全ての人に「自分が体験した学校生活」を思い出しながら読んでほしい本です。

中澤 和寛 (人間関係学科1年)

『1リットルの涙』

木藤亜也 著 エフエー出版 1986 (916/キト 書庫)

この本は、難病である脊髄小脳変性症を15歳という若さで発症した木藤亜也さんが、その闘病生活の中での苦悩や日々の暮らしについて綴った手記です。

なんてことのない日常の尊さ。生きたいという、人間の根源的な強い思い。それらがまっすぐに書かれています。

ドラマ化されたこともあるため、その題名や話の内容をご存知の方もいらっしゃるかもしれません。しかし、こちらは手記となっているため、ストーリーではなく本人の言葉そのものに触れます。また、その途中には本人や実際の手記などが写真として挿入されており、ドラマとは少し異なる「本人の歩んだ現実」を見ることがとなります。

多事多端な日々のなか、つい忘れてしまうような日々の尊さについて改めて考えさせられる一冊。福祉や介護を目指すという方はもちろん、そうでない方も、今の生活を見つめ直す機会として、一度この本を手にとってみてはいかがでしょうか。

上記の図書は図書館で所蔵しています。ぜひご利用ください。

令和7年度 図書館報告

資料の構成

(令和8年3月31日現在)

1. 図 書	蔵書数	129,893冊
	年間受入冊数	380冊
2. 雑 誌	所蔵雑誌 種数	233種 (内国誌 189種, 外国誌 44種)
	年間受入雑誌 種数	67種 (内国誌 59種, 外国誌 8種)
3. その他	新聞 種数	9種 (内国誌 7種, 外国誌 2種)
	視聴覚資料 所蔵数	1,618点
	データベース	Academic Search Premier, PsycINFO, 国立国会図書館デジタル化資料サービス, 朝日新聞クロスサーチ, 河北新報データベース, 山形新聞記事データベース

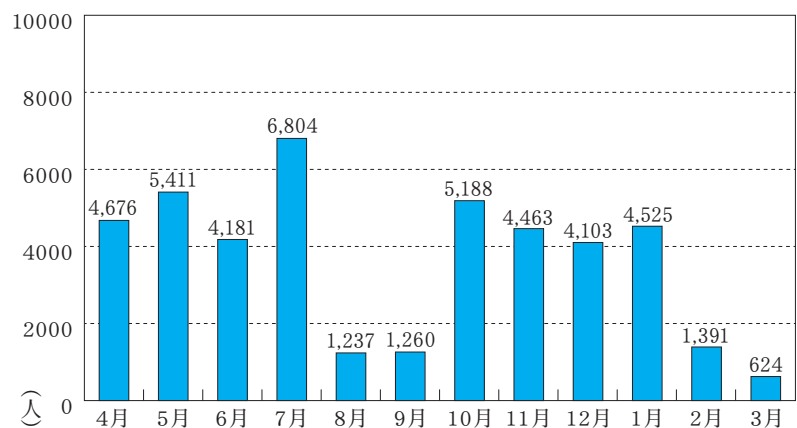
利用状況

- 開館日数 229日
(参考: 令和6年度 252日)
- 入館状況
 - 月別入館状況
入館者数(延べ数) 43,868人
 - 一日平均入館者数 184人
- 館外貸出状況
 - 学科・月別館外貸出冊数
年間貸出冊数 1,990冊

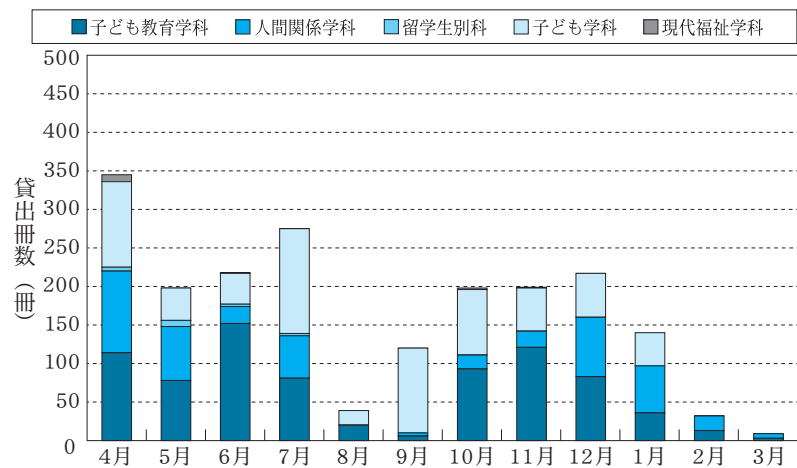
(参考: 令和6年度 2,516冊
 : 令和5年度 2,998冊)
 - 一人当たりの年間貸出冊数推移
参 考

	令和7年度	令和6年度	令和5年度
子ども教育学科	1冊	3冊	3冊
人間関係学科	1冊	3冊	3冊
留学生別科	1冊	0冊	0冊
子ども学科	2冊	9冊	6冊
現代福祉学科	2冊	2冊	1冊
本学平均	1冊	4冊	3冊

月別入館者数(令和7年度)



貸出冊数(令和7年度)



サービス提供状況

- 相互協力業務
(他大学から文献取り寄せ・または提供する件数)
 図書借受冊数 3冊
 (参考: 令和6年度 2冊)
 図書貸出冊数 0冊
 (参考: 令和6年度 0冊)
 複写取寄件数 11件
 (参考: 令和6年度 25件)
 複写提供件数 1件
 (参考: 令和6年度 1件)
- 学内文献複写 複写枚数 101枚
(参考: 令和6年度 110枚)
- 学内参考業務 受付件数 118件
(参考: 令和6年度 111件)
- 貸出ノートPC 貸出件数 143件
(参考: 令和6年度 436件)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
子ども教育学科	114	78	152	81	20	6	93	121	83	36	13	3	800
人間関係学科	106	70	22	55	0	4	18	21	77	61	19	6	459
留学生別科	5	8	3	3	0	0	0	0	0	0	0	0	19
子ども学科	111	42	40	136	19	110	85	56	57	43	0	0	699
現代福祉学科	9	0	1	0	0	0	2	1	0	0	0	0	13
計	345	198	218	275	39	120	198	199	217	140	32	9	1,990